

## 不況と戦争の時代（1931～1945）外伝

### 《1938年、幻となったオリンピック》

1936年（昭和11）、柔道を創始した嘉納治五郎（注1）が尽力して、東京にオリンピックを誘致することに成功します。メインスタジアムは、現駒沢オリンピック公園に、また選手村が、川崎市高津区津田山に建設される計画でした。

しかし、翌1937年（昭和12）7月7日、盧溝（ろこう）橋事件（注2）が発生し、日本と中国が戦争状態になります（北支事変）。中国北部の占領地が拡大するに従い、北支那臨時政府（注3）ができ、日本から土木技術者が派遣されます。その総元締めとして、内務省下関土木出張所長の三浦七郎が赴任します。

中国国民党は、侵攻してくる日本軍を足止めするため、1938年（昭和13）6月8日、黄河の堤防を人工的に破壊します。黄河は天井川であり、その氾濫は、5万4000km<sup>2</sup>（関東1都6県の面積の約1.7倍）に及びました。死者は100万人とも言われています。

黄河を人工的に決壊させたのは、史上3回目のことです。最初は、「秦」の始皇帝が、「魏」を滅ぼすため、都の開封を水攻めにしたときです。2回目は、モンゴルが「宋」に侵攻してきたとき、皇帝が南に逃れる際、黄河を決壊させ、モンゴルの追跡をかわしました。

日本政府は、中国戦線の長期化が見込まれたうえ、開催誘致に尽力した嘉納治五郎が死去したこともあり、同年7月15日、東京オリンピック開催権を返上することを閣議決定します。

また同年12月には、興亜院（注4）を発足させ、黄河の治水のため、河川技術の専門家だった内務省土木技師兼東京大学教授の宮本武之輔を技術部長に据えます。

なお、当時のオリンピック施設として、今に残るのは、荒川の治水対策を兼ねて造られた戸田ボート場です。鶴見川は、ボート練習場に充てられ、階段護岸が造られたそうです。

1936年（昭和11） 7月31日、IOC総会にて、東京オリンピック決定  
1936年（昭和11） 12月12日、西安事件  
1937年（昭和12） 7月 7日、盧溝橋事件  
1937年（昭和12） 12月14日、北支那臨時政府（行政委員長王克敏）  
1938年（昭和13） 6月 8日、黄河決壊  
1938年（昭和13） 7月15日、開催権返上閣議決定  
1938年（昭和13） 12月16日、興亜院発足

注1：嘉納治五郎（生没年：1860－1938年）は、1909年（明治42）、東洋初の国際オリンピック委員会委員となり、1912年（大正元）のストックホルムオリンピックでは、団長として参加します。そして1936年（昭和11）、国際オリンピック委員会の総会で、日本招致に成功しました。

注2：盧溝（ろこう）橋事件は、義和団の乱以降、条約により北京に駐屯していた陸軍が、北京南部を流れる盧溝河で演習をしていたとき、一発の実弾が打ち込まれたことから、紛争にまで発展した事件。

注3：北支那臨時政府は、華北の占領地が増えたために設置された日本の傀儡政権。この政権は、中華民国とは違い、満州国の独立を認めています。

注4：興亜院は、アジアでの占領地が増えたため、統一的な行政が必要であるとして設置された中央政府機関。幹部を軍部が占める中、技術部長に内務技師が登用されました。

写真は、①日本軍の侵攻と黄河堤防破壊（戦史叢書「支那事変陸軍作戦2」付表、Wikipediaより）、  
②嘉納治五郎（講道館 HP 掲載資料）

②



